［現代社会学部紀要　9巻1号, P41－48（2011）（一般論文）］

国際異文化理解における英語教育の役割*

山　崎　有　介**

English Teaching for Intercultural Understanding

Yusuke Yamazaki**

キーワード：国際語／共通語（lingua franca）、異文化理解、アジアの英語、EU諸国の英語、インド・ヨーロッパ祖語

はじめに

国際語となりつつある英語は、もはや英語圏だけのものではなく、EU諸国、アジア諸国（東アジア・東南アジア・西アジア・中央アジア・南アジア）でも共通語となりつつある。WebやE-mailを駆使しインターネットにより様々な国々の人々と交流することも当然のこととなるであろう。ネイティブスピーカーとしての英語話者とノンネイティブスピーカーとしての英語話者との割合は1：3であり、英語はもはや英語圏のものという訳ではない。そのためにも、異文化理解教育は不可欠なものと言える。その背景となる言語（英語）教育の基本となる異文化理解を言語・文化・宗教・文学を通して、欧米に限らずアジアについても広く知識を養うことが今後の日本における英語教育には必要不可欠のものである。

第1章　欧米の言語の成り立ち
第2章　ヨーロッパとアジア：英語への取り組み
第3章　日本の英語教育と異文化理解

第1章　欧米の言語の成り立ち

欧米の言語の成り立ちを考える時、大きく2つの点から述べることができる。1つはユダヤ・キリスト教における言語の成り立ちであり、もう1つは、インド・ヨーロッパ祖語の系譜に基づくグリム童話の編集者ヤコブ・グリム（1785－1863）とヴィルヘルム・グリム（1786－1859）の兄弟によるグリムの法則による言語の成り立ちである。スウェーデンの比較言語学者ラスムス・クリスチャン・ラスク（Rasmus Christian Rask, 1787－1832）により、インド・ヨーロッパ祖語の研究がなされ、ヤコブ・グリムにより音声言語の変遷がグリムの法則となって成立した。グリムの法則は特にゲルマン語における変遷であるため英語の成り立ちを考えるのに適していると考えられる。

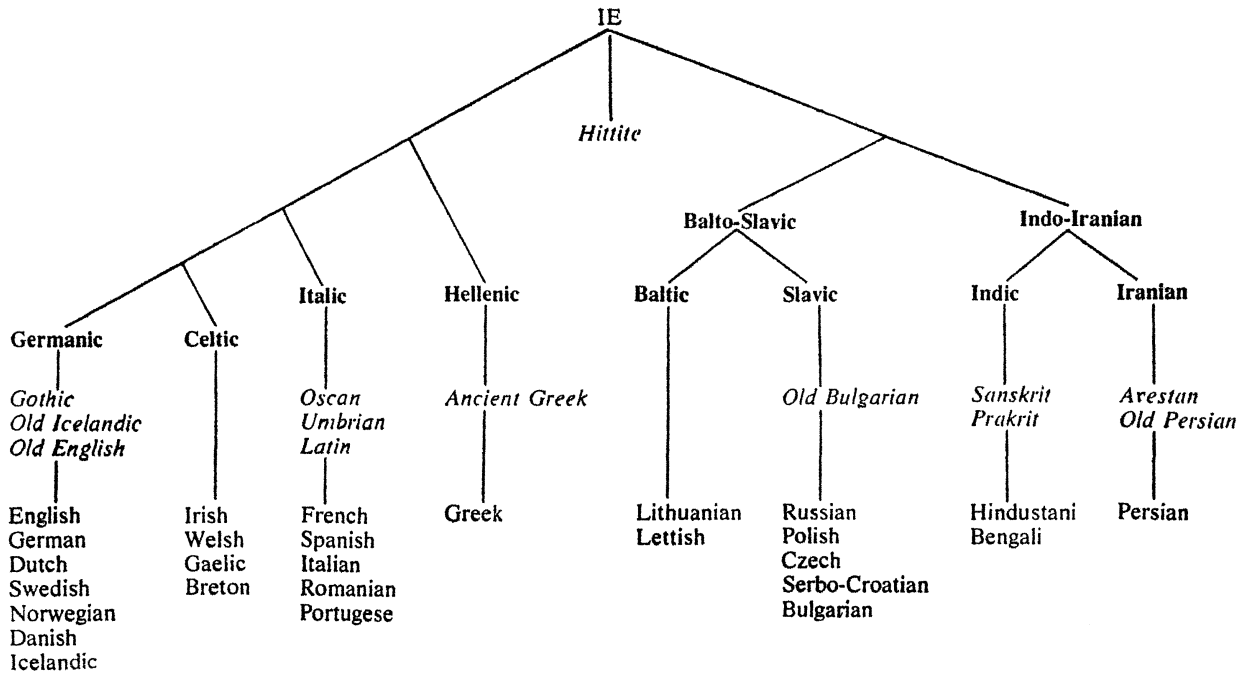
まず、ユダヤ・キリスト教における『聖書』の記述では「創世記」第9章18節においてノアと彼の息子たち（セム、ハム、ヤフェト）の記述があり、息子たちはそれぞれ土地を与えられることになる。セムは現在のアジア、ハムは現在のアフリカ、ヤフェトは現在のヨーロッパの祖となる。大洪水の後、地上の諸民族は3つの大陸へと別れていくことになるのである（第10章32節）。しかしながら、『聖書』の記述は「バベルの塔」（第11章）の記述において、「世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。」とある。やがて、神は人間の神をも恐れぬ傲慢な態度を鑑みて全治の言葉を混乱させることにした。ここから『聖書』における人の言語は多岐にわたり散っていくことになるのである。まず、ノアの方舟が辿り着いた地はアララト山であった。現在のトルコの東端にあり、バベルは古代メソポタミアの中心都市であったバビロンである。バグダードの南方である。そして、バベルという語自体が「バラル」すなわち「混乱」を意味する語と関連付けられ「聖書」の中では語られている。

一方、グリムの法則を考えるにあたり、インド・ヨーロッパ祖語の原点となる言語は、アナトリア説によるとアナトリア高原において話されていたとされる。アナトリア高原とは、トルコの東部にある高原地帯であるとされる。偶然にもノアの方舟が行き着いたアララト山があるあたりである。バベルの塔が建てられたバビロンもそれほど遠い位置ではない。

では、インド・ヨーロッパの祖語の変遷について考えたい。

この図ではヒッタイト語（Hittite）は原点と

* Received February 7, 2011
** 長崎ウエスレヤン大学　現代社会学部　国際交流学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan



(A. Akmajian, R.A. Demers, & R.M. Harnish, *Linguistics : An Introduction to Language and Communication,* MIT, 1979)

なるIE (Indo-European Family of Languages)、すなわちインド・ヨーロッパ祖語族から直接に繋がっている。ヒッタイト語はアナトリア言語派であり、『聖書』の「創世記」:「ノアの方舟の物語」における言語の原点でもある。しかしながら、ヒッタイト語は枝分かれすることなく、廃れて絶滅したと考えられている。その他の言語群 (Germanic, Celtic, Italic, Hellenic, Balto-Slavic, Indo-Iranian) は現在に至る言語へと発展し、英語は言語学的に言えばインド・ヨーロッパ語族のゲルマン語派 (Germanic) に属す。同じゲルマン語派にはドイツ語をはじめオランダ語、デンマーク語、スウェーデン語、ノルウェー語、アイスランド語があり、英語は他のゲルマン諸語と比較して文法 (特に格変化) が簡素化しており語彙的にはフランス語の影響が目立っている。今でこそ世界の共通語としての地位を確立した英語だが500年ほど前までは、ブリテン島 (イギリス本島) とアイルランド島で話される一言語にすぎなかった。ブリテン島にはじめから英語を話す人が住んでいたわけではなく、ゲルマン族が侵入する前はケルト人が支配していた。ブリテンという地名もケルト人の一部族ブリトン族 (the Britons) の名前に由来しアングル族 (the Angles)、サクソン族 (the Saxons)、ジュート族 (the Jutes) の3部族がブリテン島に侵入し、ケルト人を征服していくことになる。「イングランド」という地名はAngla+land (アングロ人の土地) が語源である。彼らの話していた言語が英語の原型にあたる言葉で、これを「古英語」(Old English) と呼び、古英語の文法は現代英語と比べるとはるかに複雑で、名詞の性も存在し、格変化もあった。古英語はドイツ語に非常に近かったと考えられている。現代英語では定冠詞はtheの一種類のみだが、古英語では18種類もあった。ちなみに現代ドイツ語には16種類の定冠詞が存在する。8世紀後半からスカンジナビア半島に住むゲルマン系のデーン人が新たに侵入し、デーン人の話していた言語との接触で古英語の文法に変化が生じた。英語文法の簡素化はこの頃から始まり11世紀のノルマン人のイングランド征服以降、加速することになる。現代英語はこのような加速化の中でヨーロッパ言語で最も単純な言語となっていくのである。英語が共通語化される可能性が急速化されたという訳である。

第2章　ヨーロッパとアジア：英語への取り組み

ヨーロッパがEURO通貨やパスポート無しで他国へ旅行ができる制度を設立していく中で、英語を共通語と意識し、英語教育を重視していることは確かなことである。先にも述べたように、英語がヨーロッパ言語の中で最も単純化された言語であるからである。

日本人が言語を用いる時には日本語が第1言語

であり、共通語であり、公用語でもあるためほとんど他言語を意識しないで日本語を用いている。教育機関（幼稚園・小学校・中学校・高等学校・大学など）で教育を受ける際も級友と話をする際も職場でも家庭でもすべてが日本語で通用するからである。極端な場合、生まれてから死ぬまで日本人は日本語さえ話していれば生きていけるのである。それでは、敢えて言語を意識し、日常言語の種類を確認してみることにする。

- 母語（第１言語）：one's mother tongue／one's native language／the first language：
  ドイツ語のMuttersprachеに由来し、現在では言語習得は母親からとは限らないことから「第１言語」と称した方がよい。
- 共通語：a common language：
  いくつかの言語や地理的方言をもつ言語社会において、その全域に渡って通用する言語や方言である。
- 公用語：official language：
  国家がその使用を公的に認めている言語で、公文書などは公用語で書かれる。
- 標準語：the standard language
  一国の規範となる言語として、公用文や学校・放送・新聞などで広く用いられるもので、日本語では、おおむね東京の中流階級の使う東京方言に基づくものとされている。
- 借用語／借入語／外来語：loanword／borrowed word／word of foreign origin：
  ドイツ語のLehnwortに由来し、ある言語体系から別の言語体系へ取り入れられ、日常的に使われる外国語・古語・方言などである。
- 俗　語：slang word：
  ①雅語の反対語で、歌や文章に用いられて来た、洗練された文字言葉に対して、それと異なる日常の話し言葉である。②標準となる口語に対して、それとは異なる方言や卑俗な言葉、さとび言葉、俚言のことである。③仏法に関係のない俗人の言葉。④ことわざ。俗諺。とあるが、②の意味で通常は使われている。
- 方言：dialect／vernacular（language）；
  田舎訛（いなか なま）り：provincial accent：
  ㋐一つの言語において、使用される地域の違いが生み出す音韻・語彙・文法的な相違。また、そのような相違に基づく同一言語の下位区分。地理的方言。㋑共通語に対して、ある地方だけで使用される語。俚言。㋒社会的身分・職業・年齢・性別などの要因が生み出す音韻・語彙・文法的な特徴で、また、そのような特徴によって区分された同一言語の変種。社会的方言。とあるが、㋐と㋑の意味で使用されることが多い。

- 擬態語（mimetic word）
  視覚・触覚など聴覚以外の感覚印象を言語音で表現した語。
- 擬音語（onomatopoeia）：
  実際の音をまねて言葉とした語。
- 擬声語（instance of onomatopoeia）：
  特に人・動物の声を真似た語。
  （以上「広辞苑第六版」参照）
- 手話言語（signed language）：
  言語に対応させた手話。
- 言語手話（sign language）：
  言語に対応させたものではなく、聾者独自の手話。

以上のような言語活動の中で、世界中の人々はその風俗習慣とともに生活をしているのである。その中で、日本国内では日本語があらゆる場面で使用されていることもあり、日本にいる日本人は、それほど外国語を意識する必要はない、と言える。そのような日本においても英語は今や小学校から習得する言語にまでなってきた。何故なのか。それは、まさに国際社会において異文化理解の仲介をなす言語が英語であるからである。今日の英語はロマンス語のみならず北欧の言語やイギリスをはじめとするヨーロッパの国々の植民地となったアジア諸国、優れた文化を有する中国語や日本語なども交え、グローバルな意味での共通語（Lingua Franca：もと主に地中海東部沿岸で通商などに用いられたイタリア語・フランス語・スペイン語・アラビア語などの混成語、語源はフランク王国の言語　Frankish languageである）に成り得た。そして、英語はWorld EnglishesあるいはNew Englishesと呼ばれるようになり、世界中の人々の言語となったのである。

今日英語を話す人々の割合は、Native-speakers：Non-native-speakersの対比で言うと１：３であると言われている。そして、Non-native-speakersは、２つに分類することができる。すなわち、英語を第２言語とする人々と国際コミュニケーションとして英語を話す人々である。国別に表記すると次のようになる。

（a）native speakers：３億7,500万人

- イギリス：5,800万人（全人口：61,565,000人）
- アイルランド：350万人（全人口:4,515,000人）
- USA：２億4,000万人（全人口314,659,000人）
- カナダ：1,900万人（全人口：33,573,000人）
- オーストラリア：1,600万人（全人口：21,293,000人）
- ニュージーランド：360万人(全人口：4,226,000人）
- 南アフリカ：300万人（全人口：50,110,000人）
- その他：リベリア、カリブ諸島、フォークランド諸島、セントヘレナ、トリスタン・ダ・クーニャ、ジブラルタルなど

＊北アメリカ大陸の英語として、アメリカ合衆国とカナダにおける英語について簡単に触れておく。

- アメリカと英語について

アメリカ社会では、英語における社会問題：英語の地位・英語の変種・英語の運用に関し、「国家語」なのか、「公用語」なのか、という論議がおこった。そして、社会統合原理：melting potという考えから、salad bowlという社会現象から英語論争を生み出している。1988年、文化権利修正案：「国民は各自の歴史的、文化的、言語的背景を維持し、育成する権利があること」から「なにびとも文化と言語のゆえに、平等に法律の保護を受ける権利を奪われてはならない」として、English onlyからEnglish plus：州民の多様な言語と文化を保護し、振興することをめざしている。多言語能力が国益につながる（ニューメキシコ州1989）という文化同化主義から文化複合主義：英語は公用語であり、西海岸の州ではスペイン語と英語を併用している傾向がみられる。アメリカ社会での英語を見ても、Black English：アフリカ系アメリカ人の８、９割が話す英語（African American English）や南部英語と西アフリカ諸語の合成語：the, then, that → da, den, dat/with, both, south → wif, bof, souf/car → cah/desk → des'/find → fond/oil → all、のようなアメリカ独自の英語が使用されている。

- カナダと英語について

最初の移住民はフランス人である。1763年のパリ条約で、イギリス人が支配権を得た。カナダは現在もイギリス連邦（The British Commonwealth）に所属している。英語話者67％、フランス語話者16.6％、バイリンガル15.3％、その他1.2％。政治、通商、宗教、学問、芸術などイギリスの伝統をついでいる。アメリカの影響も強い。アメリカ英語とイギリス英語の両方の規範が混ざり合っている。発音・綴りが両方存在する。

- 国連の言語について

『国際連合憲章』：「この憲章は、中国語、フランス語、ロシア語、英語及びスペイン語の本文を等しく正文とし、アメリカ合衆国政府の記録に寄託しておく」とある。総会、安全保障理事会、経済社会理事会では、アラビア語も公用語に加えられている。

（b）英語を第二言語とする人々（ESL国の人々：people who speak English as a Second Language）

- アジア：インド、パキスタン、バングラデッシュ、マレーシア、フィリピン、シンガポール。
- アフリカ：タンザニア、ザンビア、ガーナ、ナイジェリア、ケニアなどの国々。
- ESL国の英語の役割：公用語：行政、司法、科学技術、教育、ビジネス、出版、報道などで英語が用いられ、個人レベルではほとんど用いられない。
- シンガポールの場合：19世紀にイギリスの植民地化をされ、第２次世界大戦中に日本の占領下となり、1959年イギリス連邦内自治領となった。1965年独立し、８割弱中国系、14％マレー系、８％インド系：すべての民族への配慮から北京語、マレー語、タミール語、英語を公用語としている。行政用語は英語。英語を母語とする国民がほとんどいない状況において、どの民族からも「平等」な英語を公用語としている。
- インドの場合：公用語はヒンディー語と英語を使用している。使用されている言語は179である。人口11億9,800万人のうち英語使用者は3,700万人ほどの教育レベルの高い人々に限られる。英語を母語とする人がほとんどいないため、民族的にも宗教的にも英語が「平等」な公用語となっている。その他、ESLの国々では独自の価値観を投入した独自の英語を発達させている。

（c）国際コミュニケーションとしての英語

EIL（English as an International Language）と呼ぶ。従来は、EFL（English as a Foreign Language）、使用者の実態からEILとなった。

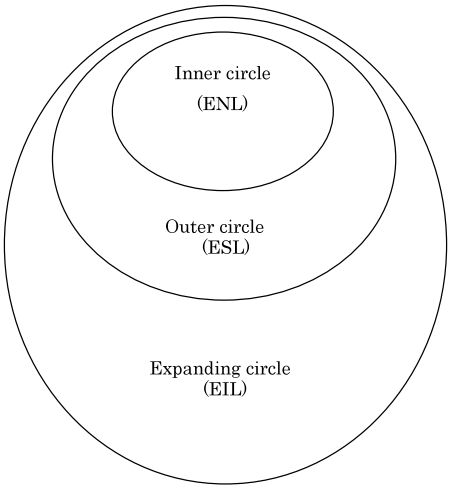
- EIL国のアジア：日本、カンボジア、中国（英語を学習している子供は大体１億人）、インドネシア、韓国、タイ、台湾、ベトナムなど。

しかしながら、英語を公用語としてはいない。重要な言語であることを認め、英語の改善と充実を試み、様々な非ネイティブスピーカーとのコミュニケーションの手段として活用している。

- 日本：2002年７月、文科省は「英語が使える日本人の育成のための戦略構想―英語・国語増進プラン」を発表し、2003年「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」を策定した。21世紀のグローバル社会を生きる日本人にとって、国際共通語である英語を通じたコミュニケーションの能力を高めることが重要であり、日本のいっそうの発展に欠かせないものであるという考えであった。

英語を第１言語としない人々にとって、英語は３段階の手段で考えられている。アメリカのイリノイ大学の言語学者ブラジ・Ｂ・カルチュールの説（Ａ）とイギリスのウェールズ大学の言語学者デイヴィット・クリスタルの説（Ｂ）の２人は共に次のような説を唱えている。

（Ａ）現代英語を表わす「三つの輪」（ブラジ・Ｂ・カルチュールの説）



Inner circle「内側の輪」はネイティブスピーカー
Outer circle「外側の輪」は英語を第二言語とする人々
Expanding circle「拡大しつつある輪」は英語を国際コミュニケーションのための言語として用いる人々

竹下裕子氏（東洋英和女学院大学教授：社会言語学者）の解説によると、「英語がこのように世界的に普及し、ネイティブスピーカーの数をはるかに超える非ネイティブスピーカーによって用いられるようになったことを英語が国際化したと表現しよう。これが、現代英語の第一の特色である。英語の国際化と同時に起こってきたことは、英語が世界各地に普及し、定着し、独自の発達を遂げたということである。…ネイティブスピーカーのうちのひとつの英語が全世界に広がっていったというわけではないということも、現代英語の重要な特色である。世界のそれぞれの地域で、英語を使うに至った事情と環境に応じて、それぞれの使用者らしい英語を使った発信と受信によるコミュニケーションが行われているのである。」という訳である。そして、ブラジ・Ｂ・カルチュールの説による「外側の輪」の人々と「拡大しつつある輪」の人々がこれからの世界の共通言語としての英語を担い、様々な文化に根付いた英語（Englishes）を話していくことになると言えよう。その中で、国際化の中の日本もまた英語教育に力を注ぎつつ、異文化の人々との交流のために英語を話していくこととなる。

（Ｂ）三重構造の英語世界（デイヴィット・クリスタルの説）

①その地域の英語をベースとした方言を家庭で

用いる。
②職場や学校ではその国の英語を用いる。
③外国人と話す際には国際的な標準の英語を用いる。

この説は、ブラジ・B・カルチュールの説で言うならば、「外側の輪」の人々と「拡大しつつある輪」の人々に相当するものであり、特に「拡大しつつある輪」の人々に期待される三重構造の英語の世界である。ESLの人々にとってはすでに実現されていることではあるが、日本のように日常生活上ほとんど英語を必要としない人々がいる国では、かなり意識をして英語を習得しなければならない。小学校からの英語が今後どのような効果を生むか、ということと大学卒業時に就職先で英語が公用語となっているのかどうか、ということが懸念される。そして、第一言語である国語（日本語）力が並行して身についていくのかどうかという問題も課題として残ることであろう。

第３章　日本の英語教育と異文化理解

日本の英語教育の課題が残る中、英語の言語習得とは別に異文化理解教育はますます重要視され、どの教育課程においても中心的なテーマとなっていることもまた見逃すことができない。EU（ヨロッパ連合）諸国の結成力による英語の使用やアジア諸国の英語への取り組みは確かに英語を国際語あるいは共通語として意識し、国力の差はあるにしろお互いの利益に通じる方策の手段としていることは確かである。しかしながら、アフリカ、中東諸国や東南アジアの教育が行き届かない人々にとって、英語はまだまだ、遠いところにある言語であり富裕層の使用する言語であることは否めない。経済の不況に苦しんでいるとは言え、世界的には裕福な教育を受けることができる日本が国際協力に向け経済的にも医療的にも、また教育的にも寄与していくことは確かなことであり、先進国としての務めである。そのためには、少なくとも小学校の段階から、異文化理解教育がなされ様々な世界事情を把握し、意識ある国際人になることができるようになることは当然のことである。その中で、英語は必要不可欠な言語なのだという意識も個人個人に目覚めてくることであろう。

異文化理解教育を考える前にアジア・ヨーロッパの国々がどれだけ英語教育に力を注いでいるかを以下の表から考えてみることにする。

主なアジア・ヨーロッパ諸国での英語教育

国　名	開始年齢	学習期間(年)	義務教育の最終学年			後期中等教育の最終学年		
			歴年齢	学習率	週当たり時間	歴年齢	学習率	週当たり時間
日　本	13	6	15	100	３－４	18	100	２－３
韓　国	9	10	15	100	３－４	18	100	３－４
中　国	10（注１）	9	15	N／A	４－５	18	47	４－５
台　湾	9（注２）	10	15	100	３－４	18	100	5
マレーシア	7	11	15	83（注３）	5	17	49	5
タ　イ	10	8	13	95	3.3	17	95	6.6
フランス	10	9	16	96	3	19	97	3
スウェーデン	10	9	15	100	2	18	76	2
ノルウェー	10	9	15	100	2.2	19	45	3.7
イスラエル	9	9	16	100	3	18	100	3
オーストリア	8	11	15	90	2.3	18	52	2
ロシア	10	7	15	55	2	17	55	2
イラン	12	6	14	100	3.3	18	100	3

（注１）中国では地域により大きな差がある。北京・上海など大都市では小学校１年生から英語が導入されている。
（注２）台湾でも、地域により導入時期には差がある。台北など大都市では小学校１年から。
（注３）マレーシアの統計は1991年のもの。

（バトラー後藤裕子著『日本の小学校英語を考える』三省堂2008より）

この表は出典が竹内慶子他編（1999）と大谷泰照編（2004）をもとに作成されていることから資料としては少々古いものではあるが、（注１）・（注２）を含めて考えると主なアジアの国にしろ、主なヨーロッパの国々にしろ、小学校低学年から中学年にかけて英語教育が開始されているということである。現在（2011年）、日本は漸く小学校５年生から義務化されることになったわけであるから、開始年齢が10歳で、ヨーロッパ諸国に並んだと言える。しかしながら、英語への接触はヨーロッパの国々に比べて比較にはならないことであろう。それに、英語教育の意味がきちんとなされない限り、低年齢化への道を辿っても英語運用能力が向上するとは考えられない。まずは、異文化理解教育に力を注ぐのが先決である。

では、異文化理解にあたりその心構えについて触れてみることにする。以下は、『異文化コミュニケーション・ワークブック』（三修社2001）に述べられている「異文化理解の心構え」である。

- 異文化理解の心構え
  - ①お互いの考え方を理解・尊重する姿勢（決めつけない）
  - ②自文化中心のものの見方にとらわれない態度
  - ③オープンな心・柔軟な心・リラックスした心
  - ④判断を保留する心
  - ⑤感情をコントロールする心
  - ⑥相手への共感
  - ⑦良い聞き手となること
  - ⑧違いを楽しむ気持ち
  - ⑨自分の失敗を笑うことのできる余裕
  - ⑩汝自信を知れ（文化的自己をみつける）

道徳教育とほぼ重なる人間同士の「和解」を目指すものである。自分を知ることから始まり、他者への理解へとつながるという訳である。つまりは、自国を知ることによって、他国への理解と和解が生まれるということである。異文化理解と英語との関係を考えるのであれば、英語を使用する諸国の文化を学ぶ段階からそれらの国々の文化と日本の文化の違いや共通性に気づく段階へと進み、他の多くの文化の間の違いや共通性にも思いめぐらし、人類社会全体における共通性や原則、課題なども考えることのできる段階へと発展させることになる。その際、「なぜ英語を学ぶのか」という問題も自ずと解消されることになる。21世紀は、世界の国々それぞれが世界化（globalize）、多文化化（multi-culture）、情報化（informationalize）する変動の時代である。その中で、日本だけが意固地になって英語へ目を向けないという訳にはいかないだろう。異文化理解のための英語教育という意識が更に高まり、Japanese Englishという名の日本人特有の英語が確立し、ヨーロッパの人々に限らずアジアの人々、そして世界中の地域に住む人々とのコミュニケーション手段として英語が日本人一人一人に当然のように考えられる時がやってきたとき、はじめて日本人にとって英語は第２言語として存在するものとなり得るのだと考えられる。教育意識が高い日本であればそれは決して遠い日のことではない。

＜参考文献＞

１）岡崎勝世『聖書vs.世界史―キリスト教的歴史観とは何か―』講談社現代新書1321（講談社1996）

２）山形孝夫『聖書の起源』講談社現代新書448（講談社　1995）

３）原　英一『お伽噺による比較文化論』（松柏社　1997）

４）望月昭彦／久保田章／磐崎弘貞／卯城祐司『新しい英語教育のために―理論と実践の接点を求めて―』（成美堂　2007）

５）大津由紀雄『日本の英語教育に必要なこと―小学校英語と英語教育政策』（慶應義塾大学出版会株式会社　2007）

６）久米昭元／長谷川典子『ケースで学ぶ異文化コミュニケーション―誤解・失敗・すれ違い―』（有斐閣　2007）

７）鳥飼玖美子『危うし！小学校英語』（文藝春秋　2006）

８）バトラー後藤裕子『日本の小学校英語を考える』（三省堂　2008）

９）竹下裕子／石川卓『世界は英語をどう使っているか』（新曜社　2008）

10）本名信行／ベイツ・ホッファ／秋山高二／竹下裕子『異文化理解とコミュニケーション１』［第２版］（三修社　2007）

11）本名信行／ベイツ・ホッファ／ブルックス・ヒル／秋山高二／竹下裕子『異文化理解とコミュニケーション２』［第２版］（三修社　2008）

12）八代京子／樋口容視子／コミサロフ喜美／荒木晶子『異文化コミュニケーション・ワークブック』（三修社2001）